

加入している市民もいる。

- ・ パーソナルケア（対人サービス：福祉サービス）は、自治体が費用負担をし、それぞれの仕組みの中で提供している。背景としては、人口構成、所得水準により提供可能なサービス水準が決定されている。例えば、ロンドンでは低所得者比率、高齢化率の高いエリアを有しているため給付額が高くなる点を考慮している。
- ・ 国は、“Fairer（より公平な） Access Care Services（以下 FACS）”を示している。FACS によれば、各自治体が、当該地域の福祉サービスの提供水準を決定できるとされている。具体的には、高齢者のケアニーズを4段階評価で査定する。サブスタンシヤル（3番目）の評価が出た人に福祉予算を出すのか、クリティカル（最上級）にならないと福祉サービス予算を出さないのかを各自治体が決めるのである。ある地域では、以前は3番目の評価段階から福祉サービスの対象者としていたが、4月からは4段階目にならないと対象にしないということはよくあることである。Southwark Council はサブスタンシヤルの対象者から福祉サービスを提供している。イギリス全土で、4段階の評価手法は統一的に運用されている。しかし、ソーシャルワーカーの力量によって主観的要素が多少入ることは否めない。なお、アセスメント結果に対する不服申し立ての制度がある。
- ・ シェルタード・ハウジングは、社会住宅の1つである。入居者は、もともと持ち家がないので処分することはない。入居条件として、持ち家のある住民は選ばれることはない。持ち家があればアロケーションポリシーにより入居できないことになっている。シェルタード・ハウジングの入居者査定基準は、ハウジングニーズを評価しているのである（一部は加味されるがケアニーズではない）。
- ・ 通常は、入所施設は、持ち家についても資産査定がある。資産額に応じて、支払い義務が発生する場合がある。支払い義務がある場合には、入所者が死亡した際に売却することになる。持ち家は、ランドレジストリに登録をしている。運用上は、持ち家である不動産に対して、貸付が行われたという帳簿が作成される。積み上げられた貸付（介護サービス等）を、死亡時に精算するという考え方である。例えば、親族等が貸付額（借金）を現金で支払うことができる場合には、売却しなくてもよい。本日、新しい発表があり、若い世代が高齢者ケアにかかわる負担額を軽減するための新しい方針がでたという。なお、資産に関する査定式は複雑である。
- ・ 居住系サービスとしては、民間ディベロッパが開発するケース、住宅協会がリタイアメント・ホームを分譲販売するケースなど様々である。それらは、個人的に購入するものであり前述の住宅給付金の制度とは別枠である。民間サービスには、様々なファイナンシャルモデル（販売方式）がある。例えば、リタイアメント・ホームの販売方式として、7割分の所有権を購入するといった方法もある。また、ある事例では、物件

を購入すると100%の所有権を購入者が有するが、購入者は、入居期間中に介護サービスの利用料は払わず、死亡時（退去時）に当該物件を売却し、販売額の5割を介護サービスの費用に充当し、残りの5割を遺産として譲渡するという方式もあるという。この例は、入居年齢によって、所有権に対する介護サービス費用への充当割合が変わる。ある地域では、入居者が予想以上に長寿であったため（介護費用がかかり）倒産したというケースもある。

⑤シェルタード・ハウジングは、退院患者の受け皿（自宅に帰ることが難しい退院患者が、高齢者向け住宅に引っ越す）として機能しているか。

- ・シェルタード・ハウジングには、退院後の受け皿としての機能はない。ただし、一部のシェルタード・ハウジングには、ステップダウン機能というサービスがある。退院後、自宅にすぐに帰宅できない状態である場合は、6週間シェルタード・ハウジング内で必要なサービスを受け、住居の改修などをするサービスがある。但しこれは非常に珍しいサービスである。現在当自治体では、630世帯のうち3世帯で提供している。

⑥医療サービスの提供状況

- ・診療所が附属しているところはない。ニーズに応じて訪問看護、訪問診療を行なう体制をとっている。
- ・医療従事者が、診療などに使えるスペースを設けることは推奨している。予防接種、検眼、問診用の部屋である。

⑦シェルタード・ハウジングの平面図等についての情報を頂きたい

- ・資料編参照。
- ・現在運営している施設に適用している施設基準については、見直しが行なわれている。Housing for Aging People Panel for Innovation(HAPPI)というネーミングで計画が検討されている。

⑧シェルタード・ハウジングで提供されているサービス配置

- ・セキュリティや防火対策担当が配置。これはウォーデンといわれる職種である。1つの

スキームに 1 人のウォーデン（責任者）が置かれている。ウォーデンはアウトソーシングも可能であるが、配置の義務付けがある。勤務時間は 8 時から 16 時である。緊急対応はアラームで対応している。住宅サービス以外の食事サービス等はアセスメントに基づき、福祉部門の対人サービスから提供される。夜間のセキュリティ・サービスは夜間に 2 回程度見回りをするが、スキーム全体の見守りであり、個別の安否確認はしていない。ウォーデンの他にハンディーマンが配置されており、電気交換や水漏れ等といった日常生活の中で発生する出来事に対して手助けを行なっている。

#### ⑨シェルタード・ハウジングの入居理由

- ・ 社会的孤立、安全面の問題、何らかの障害、歩行困難が組み合わせられる。ケアをより求める場合には、シェルタード・ハウジングからエクストラ・ケア・ホームに移りたいという入居者もいる。
- ・ 普通の住居からシェルタード・ハウジングに入居する理由は、自立した生活を続けたいというニーズが高い。孤立回避も大きな理由である。

#### ⑩入居者のコミュニケーションの状況

- ・ コミュニケーション活動については、シェルタード・ハウジングの中で様々な取組みがある。入居者で構成する委員会が企画する。ウォーデンが間接的な手伝いをする（すべてお膳立てするのではない）。自発的なものである。
- ・ シェルタード・ハウジングは、あくまで住宅であることから、何をしたいのかということ住人が決めることになっている。やりたいことに対してはウォーデンが積極的に支援を行っている。

#### ⑪一時的に状態が悪化した場合の対応

- ・ 入居者の病状が悪化して入院したとしても他の住民とかわらない。
- ・ 成人サービス部門ではリエーブルメントという取組みがあり、家の改修や福祉器具、福祉テクノロジーを活用していく。リエーブルメントサービスは、自宅でもシェルタード・ハウジングであろうが変わらず利用できる。リエーブルメントの中に介護の要素が入る場合がある。集中的に 4 週間から 6 週間に限定して支援を行う。

## ⑫終末期ケアについて

- ・ Southwark Council では、エンド・オブ・ライフ・ケアというサービスを展開している。この取組みは、終末期ケアのプランニングである。市民が、病院で亡くなることを望んでいない場合、病院以外で亡くなる過程について支援していくことである。NHS、ホスピス（NHS 以外）、自治体が共同でとりくんでいる。そういう取組みの中でシェルタード・ハウジングでなくなるケースもある。シェルタードハウジングは自宅であるので、通常の在宅サービスの一環として、終末期ケアを受けることができる。
- ・ 前述の現在計画中の HAPPI スタンダードでは、それまで暮らし続けてきた居室の中で終末期を迎えることができるように、医療器具の持込（間口が狭い）等を考慮した居住環境をつくることを検討中である。

## 参考 1 : Lucy Brown Sheltered Housing

- ・ 38 世帯が生活している。入居者の年齢は 62 歳から 98 歳である。女性の 70 代、80 代が多い。入居者の心身状況は、自立した高齢者から、要介護者、訪問診療・看護を要する高齢者までであり、幅広い状態像にある入居者を受け入れている。
- ・ 建物全体のフロント機能を担っている入り口を抜けると、入居者が集う居間、イベント時に使用する共有の台所が配置されている。戸外には庭があり、年 2 回の剪定、週 2 回の芝の世話などは、行政区ごとの担当機関より派遣されている。
- ・ 第 1 木曜日は、ボランティア支援を受け入れており、食事づくり等を実施。ボランティアの活動範囲は、日常生活の全ての領域に及んでいる。
- ・ 緊急対応に関しては、ワーデン・コール・システムにより行なわれている。ワーデンが出勤している時間（8 時から 16 時まで）は、ワーデンが、各居室のログインの状況を確認している（詰め所に全居室を確認できるシステムが配置されている）。それ以外の時間帯は、入居者に配付しているペンダント・アラームから、テレケア・システムに緊急通報が入る仕組みとなっている。ペンダント・アラームが鳴ると、SMART チームが対応する。SMART チームとは、自治体担当者が 24 時間受け付け、内容により、救急車、消防車に出動要請されるものである。また、医師にも往診の必要性について連絡を回すことができる。SMART チームの目標は、ペンダント・アラーム通報直後から 2 分間以内に対応が開始されることを目指している。

<図Ⅲ-3-3>建物全景



<図Ⅲ-3-4>ペンダント・アラーム



## 参考2：Lew Evans Sheltered Housing

- ・ 39 世帯が生活しており、内 2 室が 2 人部屋となっている。当 Lew Evans Sheltered Housing は、アフリカ・カリブ系の移民が多く半数を占める。男女比は 6 対 4 で男性が多い。
- ・ 当館は、Extra Care Sheltered Housing である。
- ・ 認知症やパーキンソン病の患者なども生活を継続している。
- ・ 食生活への支援として、ランチ・クラブを運営している。行政から運営費の補助を受けて実施しているものである。これは、朝、夕の食事は居室内で必要に応じて介護者が調理等を支援し、食事を摂る。一方、昼食は、共有の食堂に入居者が集い、準備された栄養管理の行き届いた食事をしっかりと摂る仕組みである。朝、夕の食事介護は必要に応じて、当 Lew Evans Sheltered Housing に所属している職員が実施している。
- ・ 他にバザー、服薬管理、アクティビティ（ヨガ、絵の作成等）の支援等も行っている。

<図Ⅲ-3-5>建物全景

(中庭からみた)



<図Ⅲ-3-6>共有スペース



## (2) Shenley Wood Village, Lovat Fields Village

－非営利団体 The Extra Care Trust が運営するエクストラ・ケア・ホーム－

### ①当法人 (The Extra Care Trust) の概要

- ・ 当エクストラ・ケア・トラストは 1987 年に設立された。当時は、エクストラ・ケア・ハウジング・アソシエーションと称していた。法人の掲げたサービス理念は、質の高い高齢者向けの住居を提供することであった。できる限り、高齢者が自宅で生活を続け、レジデンシャル・ホームやナーシング・ホームに移る必要がないようにすることを目指している。
- ・ 当初は、30 から 40 世帯の小規模なものであった。対人ケア（介護サービス）も提供していた（同一法人内に対人サービス部門を有している）。設立当初から、できる限り居住の場の中で、住民が自ら活動に参加できるように工夫し、自らボランティアとして参加できる仕組みづくりを目指してきた。
- ・ 当法人では、20 年前はナーシング・ホームを運営していたが、その機能をビレッジ（居住の場）の中で提供できるようにすることも目指した。現在は、ナーシング・ホームは閉鎖した。

### ②販売方法の概要

- ・ 住宅物件の販売方法は、8 割が分譲である。分譲といっても、シェアード・オーナーシップが多い。これは、所有権が 100%ではなく所有割合を設定した物権である。賃貸方式は 2 割程度である。
- ・ 物件の分譲方法の選択は、運営側にとって重要な問題である。英国人の 55 歳以上の資産状況をみると、資産の 85%は不動産に連動したものであるといわれている。そのため、所有権方式の販売方法をどのように設定するかが重要な鍵を握る。

### ③運営の特徴（力を置いている点）

- ・ 12 年前からウェルビーイング・サービス部門において、看護師が健康促進のためのサービス（早期発見、慢性疾患の管理の指導）を展開している。
- ・ 3 年前から研究プロジェクトに関与し認知症者に対するサービスプログラムを構築した。担当するスタッフは、ロックスマス（鍵職人）といわれ、心の鍵を開けるというスタンスのもと、入居者に関わっている。こうした関わりにより、従来であれば、認知症者のうち入院となるであろうケースの 5 割が、入院せずに居住

の場で、生活を継続できた。精神科系の薬剤と投与量も減少したという報告もある。

- ・ 看護師やロックスマスと呼ばれている職員は、直接雇用（職員）である。測定可能な指標で成果があがっている。
- ・ ビレッジセンターには、フィットネス、骨折につながる骨密度向上、食生活（レストラン）、美容室、アロマセラピー、売店（買い物）、図書館、IT室、木工、手芸室等があり、地域住民も利用できる。

## 参考1：Shenley Wood Village

### ①概要

- ・ 2012年2月28日にオープンした。総戸数は300戸、住民は460人である。ヘルシーなライフスタイルの促進、住民がボランティアとしての参画を目指している。住民は、車椅子を活用するレベル（歩行制限）であっても、ジムの手伝いをする等、積極的にスタッフ雇用の際の手伝い、訪問者への説明等もボランティアとして、ビレッジの運営に参画している。
- ・ 入居条件は、Milton Keynes に在住している60歳以上の市民。但し、55歳以上であればケアニーズによって入居可能である。近親者等が同居する場合には、近親者等もMilton Keynes の住人である必要がある。
- ・ 入居者の50人弱が、対人ケア（福祉部門による介護サービス）を受けている。ビレッジ外の在宅居住者の対人ケアも、当法人で提供を展開している。当法人は、地域社会のハブとしての役割りを果たすことを目指している。具体的には、聴覚障害者や、アルツハイマー協会が当該地域で活動する際の拠点を提供したり、地元住民が、当ビレッジに来て、必要なサービスを利用できるようにすること等である。ビレッジが地域との扉を閉じないように、ドアをオープンにし、住民はアクティブに活動し、コミュニティもここでアクティブに活動できるようにすることを目指している。

（住人のリンダさんにコメントをもとめる：女性、70代、手足に軽度の運動障害がみられ車椅子で移動する状態。ビレッジの視察者に対して説明をするボランティアを担当）

- ・ 私は長年近隣に住んでいた。自宅は、3つの寝室がある大きな家であったが、非常に寂しい生活であった。このビレッジがオープンすることをきいて、引っ越してきた。



現在入居している部屋は、ワンベッドルームである。1日4回の訪問ケアを受けている。自立した生活が持続できている。ビレッジ内のジムや美容院にもいっている。ネイルケアも利用できる。居室から共有スペースに来れば友人もおり、寂しさを感じない。ここでは、希望すれば、編み物やビンゴ球技もする。工房もある。自分の好みに応じて、居室で生活するもよし、アクティビティに参加することも自由に選択できる。

- ・ 介護スタッフは、非常に親切である。ビレッジに引っ越してきたことは非常によかった。自分の人生は大きく変わったと感じている。現在の生活は、小さな町の中で、自宅を持って、生活を継続している状況といえる。そこには、社交の場があり、友達もつくることができるのである（本人が望めば）。

## ②居室の状況等

- ・ 当ビレッジには、5種類の居室がある。1ベッドルームタイプ（56㎡）と、2ベッドルームタイプに別れ、後者は部屋のサイズにバリエーションがあるが約最大80㎡である。
- ・ 2ベッドルームタイプは、居間、キッチン、ベッドルーム2室で構成されている。各戸の入り口は、マンション形式であり、通路に面したドアの横がキッチンとなっており、窓越しに入居者の安否が、プライバシーが守られる範囲で確認できる設計となっている（電機がついているか、人の動く気配があるか等）。
- ・ 従来、イングランドでは家族が介護を行なうことが普通であった。しかしながら、若い世代では親の介護を現役世代が行なう割合は減少傾向にある。そのため、高齢者は自己の資産を活用することにより介護ニーズを賄っている。
- ・ 当ビレッジの入居者が、介護（対人サービス）を必要とした場合には、自宅で生活していた時と同じように、入居者が事業者を自由に選択できる。但し、当法人にも在宅サービス部門があり、当ビレッジ内にサービスが併設されている。
- ・ NHSによる訪問看護サービスが必要な入居者については、訪問看護師に該当者の居室の鍵を預けてある（自宅で生活している場合と同じように、サービスが行なわれる）。

## ③建設費

- ・ 当ビレッジ全体の建設費は、£4,000万であった。費用は、所有権（分譲）収入と賃貸収入、政府の資本整備に関わる助成制度の活用（£100万から£200万程度）、自治体からの土地の低価格提供により賄った（地域によっては、土地が全額無償提供の場合もある）。
- ・ 建設費の補助については、Lovat Fields Village は、自治体から土地の取得に関

してよい条件を提示してもらった（学校の跡地を活用している）。またバーミンガムのニュータウンにある新しいビレッジの建設にあたっては、180戸の144戸が賃貸方式であるが、£3000万の補助を受けている。いずれも国の機関であるが、ホームズアンドコミュニティ、保健省からの補助である。以前は、当法人には、基金集めのための専門部署を置き、1ヶ所のビレッジを建設する際に、200万ポンドから300万ポンドの寄附を集めていた。経済状況も悪く寄附が集まらなかったため、その組織は閉鎖した。思いつきであるが、日本であれば、大企業に申し出をして、退職後の職員を優遇するような仕組みで、寄附を集める方法はあるのではないか。

- ・ 賃貸方式、分譲方式それぞれのモデルを設計し、キャッシュフローのシミュレーションを行なうことが重要である。
- ・ 当法人では60件のチャリティショップをおいている。不要なものをバザーなどで売る方式であるが（イギリスではよくあるスタイル）60万ポンドの収入があり、Well Being ナースや、ロックスマスの人件費を捻出している。

#### ④マーケティングおよび販売方法に関するサービスモデル

- ・ 当ビレッジの入居者は、賃貸方式による入居者と、所有権（分譲）方式で購入した入居者がいる。当地域では、賃貸方式の居室は、初期の段階では自治体との取り決めで、公営住宅居住者のみが、利用できることとされた（賃貸方式の居室は、100%転居前の居住場所が、公営住宅であった者の枠とされているという意味）。但し、賃貸方式の居室から、転居者が発生した場合には、随時その割合を70%まで下げることと認めるとの規程があった（アフォードブル・レント：行政から賃料等に関する指導がある）。
- ・ 所有権（分譲）方式のマーケティング活動にあたっては、半径5マイル×1.6キロメートルにダイレクト・メールを送付した。興味がある市民にプレゼンテーションを行なった。その際、持ち家の資産評価を行い、転居希望者に情報提供を行った。具体的には、貯金が£23,000以上であると、公的介護サービス（対人ケア）が必要となった際に、費用が応能負担となるため、高額な貯金を有したままでいるよりも、所有権（分譲）方式の居室の購入資金に回し、資産にした方が得であると説得をしている<sup>ii</sup>。当ビレッジの居室の所有権は、自宅としての「住まい」であるため、公的介護サービス（対人サービス）利用時の応能負担の資産査定対象には含まれない。つまり、持ち家（自宅）にいるままで生活するよりも得なのである。
- ・ 所有権の割合に応じた分譲方式は、入居希望者の資産の状況に応じて設定できる。但し、全居室数に対してその割合が高くなると、法人としては、銀行からの融資額への返済に困難が生じるため、十分なシミュレーションが必要である。

<sup>ii</sup> この点については、政府による「デルノット報告書」を参考のこと。

- ・ 当ビレッジの所有権は、値上がりしないルールとなっている。仮に、£50,000 で購入すれば、死亡時には同額で法人が買い取る。その際の現金収入は、遺産として残すことも可能である。イギリスでは、不動産が必ず値上がりする実態にあり、低下することは皆無である。
- ・ 日本では、使用権方式であるため、入居者は死亡時に何の資産も残すことができない。一般的には住み替えを手控える傾向にあると考えられる。これはアメリカのサービスモデルと似ている。
- ・ 非営利団体である当法人は、所有権（分譲）方式が中心である。民間企業が開発しているリタイアメント・ホームの相場は、£500,000 以上であるとも言われている。
- ・ 当ビレッジの価格については、100%所有権の居室の場合、£165,000 から£230,000 である。当然2ベッドルームの方が高額である。所有権の割合に応じて値段が下がる方式をとっている。
- ・ 英国内では、「ホリスティック（包括的）」なスタイル、つまり、住まい、対人ケア、看護等を全体として提供している法人は少ないはずである。
- ・ 当法人は、「ホリスティック（包括的）」の精神としては、ラフスタイルの強調、ボランティアを強調するスタイルである。
- ・ ミッドランドから北東部のリバプール、ヨークシャーのシェフィールド圏域では、当法人が13箇所（箇所）のビレッジスキームのエクストラユニットを提供している。その他、17箇所（箇所）で、50戸から90戸の小規模のユニットも運営している。5ビレッジが開発中である。地方にも点在している。
- ・ 賃貸入居者の条件として、必ず自治体と入居条件の設定を行なっている（以前すんでいた公営住宅は手放す等）。
- ・ ウェルフェアアドバイザーが全入居者について、包括的なアセスメント、アドバイスを行なっている。
- ・ 価格は、同地域の不動産価格の2割程度高い印象を持っている。これは付加価値の高い設備があるためである。
- ・ 自治体は、「エクストラケア・ハウジング・ストラテジー」という戦略を構築している。政府は、多額の費用がかかるレジデンシャル・ホームを減らすための取組みがある。在宅における訪問介護の数を減らすことも自治体に課せられている課題である。
- ・ 自治体は、ヘルスケア・ウェルビーイング・ボードを設置し、戦略やアセスメント等を行っている。
- ・ 自治体は、エクストラケア・ハウジングに対して、所有権、賃貸の割合を指定してく

るが、決定権は法人にある。賃貸の割合を高くして欲しいというのが自治体の希望である。

#### ⑤入居者の日常生活での費用負担について

- ・ サービス・チャージとして、管理費の負担がある（庭のメンテナンス、窓ガラスの清掃等である）。アメニティチャージでは、電気、高熱費の負担が発生する。
- ・ 自身の住居内のメンテナンス料も別途負担が必要である。
- ・ 介護師の派遣は、1時間 14 ポンドである（公的介護サービス：対人サービスとは別枠である）。
- ・ 他に£40,000 払えば、将来介護が必要となれば、定額で介護を受ける権利が得られる。
- ・ ジムの会員費等は別の支払いが生じる。
- ・ 公的介護サービス（対人サービス）は、自治体のアセスメントに該当すれば、当法人もしくは他のサービスを利用することが多い。当法人のサービスを利用する傾向にある。

#### ⑥職員配置について

- ・ 職員配置についてみると、常勤は、マネジャー1名、ヘッドケア1名、介護スタッフ3名、看護師1名、ロックスマス1名、ジムインストラクター1名、ケアコーディネータ1名（ローテーションシフトを組む仕事等）、ビレッジ内のアクティビティを計画・コーディネートする担当1名、受付1名である。
- ・ 非常勤事務担当1名。非常勤セールス担当者、介護師が6人の夜勤担当者がいる（2名体制で実施）。日中の介護師の数は、ニーズにより変動する。メンテナンス職員常勤2名、非常勤1名、アウトソーシング（レストラン、共有スペースのハウスクリーニング等）がある。

#### ⑦入居者の ADL の変化等

- ・ アストンユニバーシティの調査プロジェクトに参加している。160人を対象に3年間の追跡調査を行なっている（当法人の14箇所のビレッジで実施中の1年目）。歩行能力、ADL、認知機能、メンタルヘルス、QOL等の国際的尺度を使用。一例ではあるが、入居後向上している入居者が存在する。当ビレッジでは、メディカルドクターや研究者が当ビレッジをベースに研究を行なっている。

#### ⑧看取りのケアについて

- ・ 当ビレッジでの看取りを希望する入居者がいれば対応する。病院での治療の後予後がよくない場合には、ビレッジでの対応についても検討している。医療機器の使用ができる住まいづくりをしている。ハード面、ソフト面（褥創ケア等）の対応も可能である。緩和ケア、看護が必要な入所者については、こちらでケアを提供できる。ニーズに応じて対応可能である。
- ・ 当ビレッジは、入居者がハードを移り変わるのではなく、住まいの中に必要なサービスが入っていくことを目指している。そのため、入居者は自分の居室を移動することなく、生活を継続することができる。この1年間で5名の死亡者がいた。

#### ⑨認知症者への対応（ロックスミスについて）

- ・ ブラッドフォード大学<sup>iii</sup>と共同で開発した、“コーナーストーンズ”というプログラムの研修を受けた、ロックスミスと呼ばれる職員が担当している。
- ・ “コーナーストーンズとは、認知症のタイプの把握（知識）、個人の理解（社会的バックグラウンドの把握、職業、学歴、興味のあること）を進め、鍵を開けていくという考え方に基づいたプログラムである。
- ・ 認知症高齢者の情動が揺り動かされる場面を理解し、解決していく。といわれている。
- ・ 英国財務省もロックスミスに関心を寄せており、今後、全国展開により医療費の適正化を進めることが目指している模様である（当法人のウェブサイトに掲載している）。

#### ⑩入居者の心身機能の維持等を目指した取組み等（ビレッジの質向上）

- ・ 当法人が運営するエクストラ・ケア・ホームの待機者は多数いる。バッキンガムでは5年待ちである。
- ・ 職員採用にあたって、「ハザード・ハウス・エクササイズ」というポリシーを掲げている。住民に参画を求めながら、全てのことを進めていく必要があるからである。住民にも厳しい採用基準により選ばれた職員であることを説明する必要がある。
- ・ 同業他社と比べても職員の定着率は非常に高いと考えている（90%以上である）。
- ・ 採用後は、研修プログラムが用意されている。また、マニュアルハンドリング（重いものの持ち運び）も重要なトレーニングプログラムの1つである。通常3週間の集中的なトレーニングを行い、薬剤管理、尊厳とプラ、個人情報保護、内部告発、理念の理解、初期救命、衛生・安全、ケアプランニング、防火等である。その後は、国の職

<sup>iii</sup> Enriched provide project(Pro.Down Brooker, Bradford University)

業資格の NVQ の第 2 段階の取得を目指す。

- ・ ビレッジ立ち上げ当初は、経験者を採用しておくことが重要である。但し、ビレッジが一定程度成熟すれば、その後は、未経験者も採用できるだろう。高齢者とともに働きたいという動機が最も重要である。当法人のスタンダードを理解し実行できることが重要である。
- ・ 国の基準では、介護サービス機関は、スタッフの 50% が NVQ を有していることが規程されている。当法人は、この値が 90% を達成している。CQC が公開しているデータでは、当法人の評価点はエクセレントであった。
- ・ 当法人のブランドを構築していくことは重要である。それは、後退するのではなく前進するということをイメージとしてつくりあげている。グレードの高いものを作り上げることに社員は忠誠心を持っている。
- ・ イギリスでも、自治体が提供主体であった頃の居住系サービスは、ユーザーとプロバイダーが分離しており、見かけ上機能的であったが、生活の場としての魅力は乏しかった。一方、現在は、入居者が、生活にプライドを持っている。その暮らしを見てもらいたいという考えがある。住人が法人にとっての財産であると考えている。
- ・ 14 年前は、自宅での生活が難しい場合は、ナーシング・ホームかレジデンシャル・ホームに入居することしか選択肢はなかった。選択するにしても、高齢者自身にとっての決定打ではなかった。現在のエクストラ・ケア・ホームは、自分が選択しているという思想の転換があるのだと感じている。
- ・ 当ビレッジには、認知症者も生活しているが、個人との連携やコミュニティとの連携を健常者と分けずに行なうよう工夫している。一般的内には、認知症高齢者が、コミュニティ内に 10% から 20% 程度といるといわれているが、当ビレッジの入居者割合もその程度である。普段からモニタリングをしており、必要性に応じてロックスマスにつないでいくことにしている。例えば、早期の段階であると想定されれば、ロックスマスにうまくつなげ、認知能力をできる限り維持するように働きかけている。また、アストン大学と共同研究では、エクストラ・ケア・ホームでの生活が高齢者の心身機能の自立にどのように寄与するか検証中である。
- ・ 当法人の成功例として、10 年間ナーシング・ホームで生活を継続していた入所者 28 人が、当法人のエクストラ・ケア・ホームに転居したところ、自立度が目に見えて回復した例がある。環境のつくり方、サービスの提供の仕方（依存しない生活の実現）によって、自立度を高めることが可能であると考えている。
- ・ 自分はナーシング・ホームで勤務した経験がある。その際の印象と比較すると、エクストラ・ケア・ホームに転居すると、高齢者は財務面の問題（金銭管理等）からも開

放される点、自分の意思決定ができる点が、高齢者の自立度を高めることに寄与すると確信している。

- ・ 重要な点として、従来のホームのモデルは、そこが最期の居場所というモデルである。エクストラ・ケアホームは、通過点であり必ずしも最期の居場所ではない、先があるというイメージを創り出そうとしている。生きるための通過点というイメージを作り出すことに努めている。こうした点も、高齢者の自立を高める上で重要であると考えている。
- ・ ある事例として、脳卒中で心身機能が低下したサッカーレフリーを職業としていた高齢者が、当ホームに転居してきた。その後、自立度が劇的に回復した例がある。対象者は、転居後、それまでの人生で抱えていたあらゆる悩みからも開放されたと聞いている。こうした点も自立度の維持のためには重要な要因であろう。
- ・ 10年前に実施されたキールユニバーシティの調査では、入居者は、Well Being、身体感覚の若返り度が向上したという結果が報告されている。
- ・ 高齢者の Well Being の維持には、フォーマルなレベルでも、インフォーマルなレベルでもコミュニケーションが沢山発生することが重要であると感じている。それは、氷山のような形をしていると感じている。フォーマルなコミュニケーションは水面の上であるとすれば、水面下にはインフォーマルなコミュニケーションが発生するのである。
- ・ 高齢者自身が持っている能力を発揮する機会を創出しているが、コミュニティで生活しているよりも、当ホームにいる方が、そうした機会が得られやすいと考えられる。ホームには、役割りを担うことに対して奨励する雰囲気づくりや、参加しようとする高齢者に対して、サポートが得られるような仕組みを準備し支援をしている。
- ・ 例えば、独居の女性が地域で暮らしていたが、空き巣にあったことから、昼間の 14 時から雨戸を閉め切って、さらに閉じこもった生活をしていた。転居後、多くの人の前でスピーチをするなど、安心感やコミュニティへの参加によって QOL が大幅に改善した人がいた。
- ・ 一方、これまでの人生経験から、住人の中に自然とヒエラルキーが発生することを感じている。それまでのキャリアが発揮される傾向もある。住民居議会や活動グループの中で自分の意見が表明できる雰囲気づくりをしているし、その機会もある。主婦として家庭内での生活が長かった方は、このビレッジの中で成長の機会を演出していけば、何歳であってもさらに新しいことに挑戦し、成長していこうという流れにのる方が多くいる。
- ・ 常にリーダーになりたがる人や、その役割りに乗り切れないような人もいる。そのため、

一定の取り決めはしておいた方がよいだろう。例えば、会議の男女比率やリーダーの決定方法などである。

- ・ アストン大学の研究からも、エクストラ・ケア・ホームの生活は、高齢者の自立生活を維持する（期間が長くなる）上で何かポイントが隠されていると考える。Well Being ナースの存在、社交的な機会への参画、自分の価値を認めてもらえる、スキルを活用して貢献できる、レストランで健康的な食事をとる、ジムで体力づくりをすることである。

### ⑪入居者の高齢化への対応

- ・ 今後、入居者のさらなる高齢化により介護ニーズが高まることが予測されるが、対人サービス（公的介護サービス）だけでは、入居者のケアを賄いきれないのではないかと考えている。
- ・ しかし、14年間運営を継続しているビレッジの例では、ケアニーズはオープン当初と、14年後で変わらないことを実証している。それは、入居者の年齢層のモニタリングを綿密にしており、必ず若い層の人が入居するように工夫している。バランスのとり方は、常に気をつけている。仮にケアニーズの高い高齢者が死亡した場合、余裕があれば同じケアニーズの高齢者が入居するが、そうでなければ若い層の入居を進めるようにしているからである。ビレッジの運営上この点は重要である。
- ・ 一方、心身機能と年齢は必ずしも直線的に相関しているわけではない。年齢層は、55歳以上を5歳きざみに管理し、介護を要する入居者を1/3に抑えることがコツである。売りの物件が出た場合、その時点で既に入居者の1/3が要介護者であれば、ウェイトリングリストの中では、若い年代層が優先的に入居しやすいということになる。但し、この際、医学的ニーズがあっても、自立的な生活ができればよいのである。これらの管理はビレッジマネジャーが担当している。常にバランスをとっていくことが重要である。プロジェクトの最終責任者は、ビレッジマネジャーであり、利益率、衛生安全、規制当局との交渉、発注管理等についても全ての責任を負う。

<図Ⅲ-3-7>建物入口 (Shenley Wood Village)





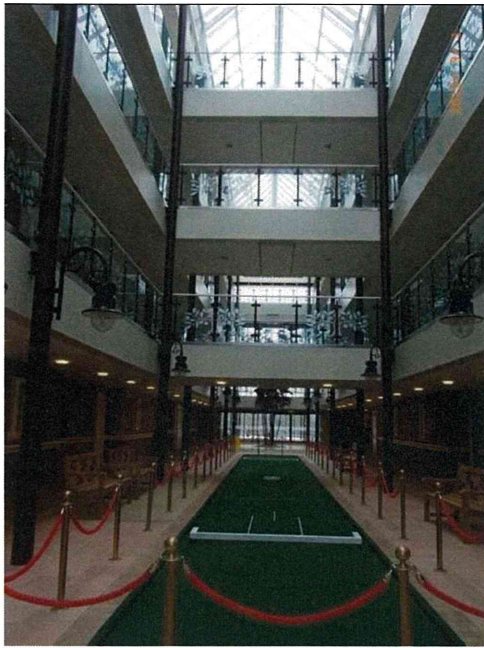
<図Ⅲ—3—8>庭を中心とした敷地の状況 (Shenley Wood Village)



<図Ⅲ—3—9>入り口から見たビレッジ内の共有スペースと居室棟への入り口  
(Shenley Wood Village)



<図Ⅲ-3-10>居室棟と廊下 (Shenley Wood Village)



<図Ⅲ-3-11>居室棟のフロアごとに配置されたごみ置き場 (Shenley Wood Village)

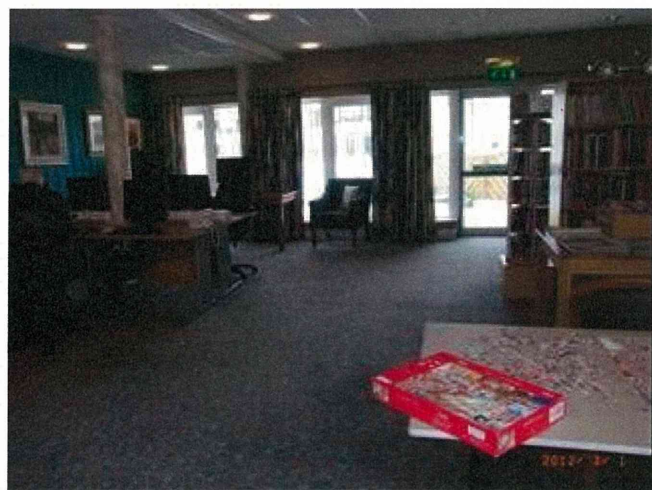


<図Ⅲ-3-12>共有スペース (Shenley Wood Village)

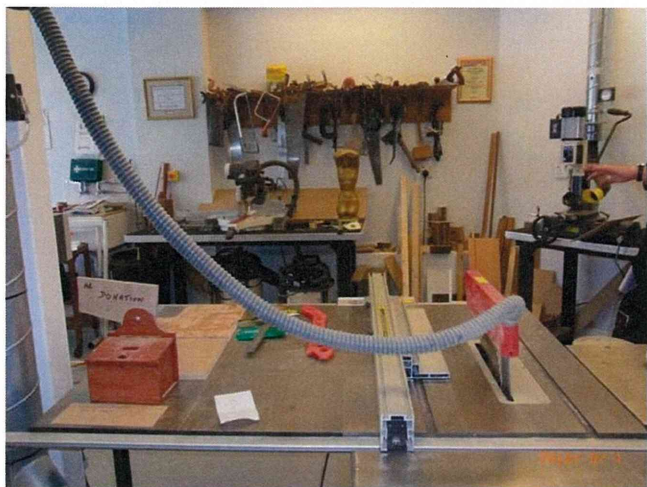
美容室・理髪店



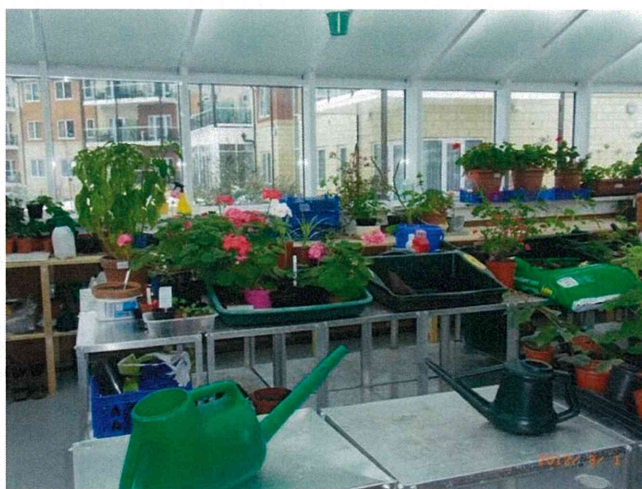
図書・インターネット室



木工室



園芸室



健康管理室



集会室

